

2007、2、10

マッカーサーにNOーを言った男・白洲次郎

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

『シラス・ジロー』が遅すぎるブームを呼んでいる。



「クール・ジャパニーズ」「昭和の快男子」「GHQ,マッカーサーと戦った男」—さまざまな形容詞がつけられているが、「サムライ精神」と「英国紳士道」をブレンドしたその無類のダンディズム、かっこよさは、日本近代おとこ史上に初めて登場した颯爽とした国際人であり、成熟した大人の魅力にあふれている。

1902年(明治35)、兵庫県芦屋で貿易商・白洲文平の二男に生まれる。文平は米ハーバード大卒で、ドイツで学び、貿易商で成功をおさめるが、その後、倒産する。

御曹司の次郎は1919年(大正9)、17歳で第一神戸中を卒業後、英国ケンブリッジ大で2番目に歴史の古い『ケンブリッジ大・クエア・カレッジ』(全寮制)に留学、青春の最も多感な10年間を過ごす。

180Cmの長身で、石原慎太郎に似たハンサム。英国貴族の子弟にコンプレックスを持つどころか、金持ちの親から毎月1千万年以上という仕送りがあり、英国車ベントレーやレイシングカーなど2台を買って乗り回すというカーマニアぶり。



不良、野生児だった次郎はここで英国紳士のマナー、生活スタイルを徹底して叩き込まれた。

28年(昭和3)に、父経営の「白洲商店」は倒産し、次郎も帰国。英字新聞に勤めながら、華族の娘で4歳から米国に留学していた樺山正子(18歳)と結婚する。黄金のカップルの誕生である。

太平洋戦争前年の1940年(昭和15)、日米戦争の不可避とその敗北を予測して会社をサッサと辞めて、町田市旧鶴川村のわらぶき農家を購入して引っ込んだ。ここが生涯の住処『武相荘』(無愛想の意味)となった。

「戦争になれば必ず日本は敗れ、空襲で東京は焼け野原になる。食料がなくなるから、俺田舎で農業をやる」。

その体験から両国のケタ違いの国力差、英米人のジョンプル氣質を知っていたのである。英国の貴族階級が田園生活を楽しむ「カントリー・ゼントルマン(田舎紳士)」に転進し、本気で農業に取り組んだ。

案の定、敗戦、東京は廃墟に。国難に白洲の出番がやってくる。旧知の外相、その後首相となる吉田茂から懇願され、終戦連絡事務局参与となり、GHQ(連合軍総司令部)と英米理解の知識を生かしキングス・イングリッシュを駆使して、GHQと対等に勝負した。

マッカーサーの参謀で GHQ ナンバー2であったホイットニー民政局長と初対面の際には、見下した態度の「白洲さんは大変うまい英語ですね」と言ったのに、即座に「あなたも、もう少し英語を勉強すれば、うまくなりますよ」と切り返した。



GHQ はホ局長が中心となって憲法草案をわずか1週間で作り、日本側に押し付けてきた。日本側はこれを徹夜で翻訳して日本案を提出するが、白洲は日米の考え方の違いを『ジープ・ウエイ・レター』という英文の反論書に書き上げて突きつけた。

白洲は「プリンシプル(原則、哲学)」をもった男であり、それは、日本精神と英国紳士のモラルで磨き上げられたハイブリッド性であった。

大部分の日本人が敗戦によってそれまでの「鬼畜米英」から一転して、意気疎そうして卑屈になり、GHQ にペコペコする中で、白洲は毅然として交渉に当たり「従順ならざる唯一の日本人」と評された。

その苦闘ぶりは一切家族にも口にしなかったが、寝言でよく「Shut up!」「Get out!」など大声でどなるのを正子は何度も耳にした、という。

1948年(昭和23)年、白洲は貿易庁長官(今の通商産業省の前身)となり、その後の日本の貿易立国の基礎を築くと同時に、吉田首相の外交顧問役を続けた。

51年(昭和26)9月、サンフランシスコ講和会議には特別顧問として吉田全権一行に加わった。渡米の飛行機では全員スーツ姿だったが、唯一、白洲は機内ではTシャツ、ジ-

パンスタイルで、「アメリカはたかだかTシャツ、ジーンズの国。たいしたことないよ」と笑っていた。

サンフランシスコ講和条約では、吉田は当初、英語で受諾スピーチをする予定だったが、白洲は「講和条約は対等の関係だ。日本語で演説をすべきだ」と急きょ変更させ、市内の中華街に筆と巻紙を買いに行かせ、日本語に書き直させた。スピーチの巻紙は30冊もの長さになった。

GHQ の占領期間中、白洲は「吉田の黒幕」、「悪しき側近政治」、「財界の裏の実力者」とさんざん悪口をいわれたが、マスコミに自らは登場しなかった。昭和34年、57歳となった白洲は政財界の第一線から完全に身を引き、「カントリー・ゼントルマン」にもどって、ゴルフ三昧とカーマニア、趣味に没頭の悠々たる晩年をすごした。

寡黙な白洲らしく遺言は「葬式無用、戒名不用」のわずか2行であった。

(前坂 俊之)